

---

# ライラックの庭

cian

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライラックの庭

### 【Nコード】

N9932L

### 【作者名】

c i a n

### 【あらすじ】

ある事情で女性不信になったデイヴィッドは、ライラックの匂い薫る庭で一匹の白い犬とその飼い主に出会う。

それは、社交界に疲れた彼の心を癒す物語の始まりであった。

## 序章（前書き）

中世イギリスをモデルにした、とことんほのぼのな（でも一応）恋愛小説です。

初投稿で不慣れなところも多いですが、お付き合いいただけたら幸いです。

## 序章

白い花が満開に咲き誇る木の下で、彼女はふと視線を上げた。

目に映るは人間の男女。一見恋人同士かと思つたが、女が一方的に男に寄り添つてゐる姿に違うかもしれないと思ひ直す。

おそらく2人はこちらの存在に気が付いていないのだろう。あえて教える必要もないし、彼女も邪魔をする気はなかつたので、くると踵を返したが、女の激しい声が耳を貫いて、驚きの余り足を止める。

「ふざけないでよっ！」

振り返れば、男が片耳を押えてしかめ面をしていた。

至近距離というのもあるだろうが、人間である彼がそれだけうるさいと感じたならば、彼女がうるさいと思つのは当然だ。犬である彼女の聴力は人間の数十倍はあるのだから。

男が、女とは対照的に静かに告げる。

「悪いが、申し出を覆す事はしないよ、レディ・カーライル。私は君と結婚する気はない。婚約は解消する」

「式まであと一週間もないのよ!？」

「君は私を何も知らないと思つてゐるだろうが、私の目も耳も節穴ではないのだよ。東屋での密会は楽しかつたかい？」

「なっ！」

「しかも、お腹には子どもがいるとか。そのまま黙つて結婚すれば私の子とでも誤魔化せると思つたのかな？私と君との間にはそんな事実はないというのに」

その言葉に女は確かに逆上したようだ。数秒後、何かを叩く音が庭に響き、聞き取れないほど早口に女が何かを喚きたてた。

それに対し男はどこまでも冷静に返事をする。

「悪いが、君が社交界にいくら毒を流そうと醜聞を曝そうと、私は君の援護をするつもりはない」

「人でなし！」

「なんとも言う方がいい。その代わり、子どもの父親に責任を持つよう進言はさせてもらうよ」

木陰に潜んだ彼女にはよく見えないが、聞こえる声音はとても冷やかで、思わず女に同情しそうになる。しかし、その女が先日彼女を汚らわしいものを見る目つきで下げずんだ相手だと気がついたので自業自得だと心の内で呟く。

やがて女が苛立ちを隠さない足音で遠ざかり、男だけになる。

すると、男が思いもよらない行動に出た。彼はなんと、彼女のいる木陰を見て軽く手招きをしたのだ。

「おいで」

先ほどまでの冷やかな視線はどこへ行ったのか、実に柔らかな笑顔で彼は彼女を迎える。

戸惑いながらも静々と近寄ると、大きな手が彼女の頭を撫でる。

その手つきにうつとりとしながら身を寄せると、彼は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「いい子だ。よく躡けられてるんだな」

それは一般的には褒め言葉なのだろうか。ただ、彼女の主人が聞いたら顔を顰めていただろう事は想像ができる。愛するべき彼女の主人は、彼女を教育はしても躡ける事はしていないと常々周りに言っているのだ。

一介のグレート・ピレニーズである彼女には人間の言葉のニュアンスなどわからない。それでも、目の前の彼が好意からその言葉を告げた事はわかったので、彼女は抵抗する事もなく撫でられるままに任せる。

彼はしばらく頭を撫でた後、楽しそうに彼女を抱きよせる。彼女から見ても煌びやかな衣装を汚していいものかと一瞬逡巡したが、彼が望むままに抱き寄せられた。彼の肩に頭を乗せると、彼が優しく背中を擦ってくれたので心地よさに目を閉じた。

ふと、その手が止まり、彼が小さくため息を吐くのが聞こえる。

何事かと首を向けようとしたが、しつかりと抱きかかえられているためそれは叶わない。

「……そのまま結婚した方が、紳士としては正しいのだろうな」

ポツリと呟いた言葉は、先ほどの女とのやり取りの続きだろう。

苦しい声に、彼女はピタリと動きを止める。

「でも、他の男の子どもを宿した女を妻にする事はしたくなかったんだ」

それは、冷徹に女を切り捨てた男の声と同じだと思えないほど弱々しかった。

彼の告解を要約すると、婚約した女性は他の男と密通し子どもを成したらしい。てつきり彼が父親だと思った侍女の祝いの言葉で、彼はその事実を知った。自分にはまったく覚えのない子どもを妊娠した婚約者に、彼は決別の言葉を言い渡した。

結婚予告も出し、正式な式まで残り5日。名誉のためにはそのまま結婚するべきだったのかもしれない。自分の名誉のため、そして彼女の名誉のために。彼女は列記とした伯爵家の娘であり、名誉は何にも増して重んじられる。たとえ彼女が淑女でなかったとしても、その事は秘密裏にされているのだから。

浮気相手はプレイボーイとして名高い子爵家の三男坊で、公爵である彼に比べ地位も金もない。だから婚約者はそのまま結婚しようとしたのだろう。そんな屈辱を与えられた相手とこれから一生を共にするかと思うと眩暈がした。しかも、生まれてきた子どもが男の子だった場合、その子が彼の嫡子として彼の公爵という称号を受け継ぐのだ。それだけは絶対に避けなければならない。

彼の話聞きながら、彼女は人間で言う首を傾げるような動作をする。

まったくもって、人間というのはなんて面倒臭い生き物なのだろう。「名誉」だとか「爵位」だとか、そんなものが生きていく上でなんの役に立つのか彼女には理解できない。お腹の足しにもならない事でこれほどに悩めるのが人間だというのは知っているが、毎度

の事ながらそう思う。

それでも彼女が身じろぎせず彼の話を聞いているのは、『人間でない貴女だから、打ち明けられる話があるのよ』と笑う主人の言葉があるからだ。

人間はとてはややこしい生き物だから、彼らよりは単純な生き方をしているこちらが手を貸してあげた方がいい時があると、彼女は経験からよく知っていた。

黙って話を聞いて抱き締めさせてあげれば、少しは気持ちが風ぐだろう。彼女の主人はいつもそうしている。そしてそれは彼にも有効であつたらしい。しばらくそうしていた後、彼はまだ浮かないがまだマシな顔でふわりと微笑んで彼女から身体を離れた。

「お前は本当にいい子だな。まるでこちらの気持ちがわかつているみたいだ。このまま連れて帰りたいよ」

それはご免こうむる。

彼の腕の中は気持ち良かったが、彼女にはそれ以上に心地よい主人の存在があるのだ。

「冗談だよ」

立ちあがって誇りを払うと、最後にもう一回、名残惜しげに頭を撫でると彼は庭から立ち去って行った。

「あらリラ。お帰りなさい」

主人の部屋に行くと、彼女の大好きな主人が満面の笑顔で迎えてくれた。

彼女のベッドに足をかけて、頬を一舐めすると、くすぐったそうな笑い声をたてながら主人は彼女を抱きしめる。

それから「あら」と呟きながら彼女の身体を優しく撫でて問いかける。

「誰かに甘えてきたの？ 薄情な子。それとも、甘えさせてあげたのかしら？」

残り香を付けて、一体誰とデートしてきたの？と微笑む姿は女神のようで、彼女は主人に身体をすりよせる。

「ふふ、いい匂い。お前の恋人はとても素敵な人みたいね」

主人はそう言うが、彼女にとっては主人以上にいい匂いのする人はいないし、いつだって主人が一番である。

愛すべき主人のような人間がいる。主人のような人間ばかりではないけれど、その事実があるから彼女は人間という別の種族の生き物を心の底から愛している。だから手だって差し伸べたくなる。

今日の彼もいつか、彼女のように本当に愛すべき人間に出会えるといい。彼女をやさしく受け入れその背を撫でてくれた彼は、幸せになるにふさわしい人物なのだから。

そう願いながら、彼女は主人の膝にそっと寄り添った。



## 第一章

その日、デイヴィッドはエルストン子爵自慢の庭を歩いていた。

この庭を歩くのは2回目だ。以前来た時はとてつもなく不愉快な気分だったので、ろくに花も見られなかった。

結婚直前に婚約者に裏切られて3年。あの時は本当に散々だった。自分の親族と相手の家に事情を説明し、自分ではない男の子どもを宿した女との婚約を解消した。彼女は手ごわくて、最後まで彼の子どもだと言い張っていたが、それが嘘である事は彼が一番よく知っている。名誉を重んじてそのまま結婚するよう進言もされたが、彼の潔癖さがそれを許さなかった。

結局、浮気相手である子爵家の三男と話をつけ、彼らを結婚させ本当の両親の元で子どもを産ませた。生まれた子が父親そっくりな男児である事を知った時には、間違った選択をしなかったと心の底から安堵したものだ。

ただ、彼の評判はかなり落ちていて、彼はしばらく社交界から姿を消すことにした。元々社交界もあまり好きではなかったものでちょうどいいくらいだった。3年経った今でも評判は回復しきつたわけではないが、ささやかな揶揄や非難に耐えられるくらいには彼も強くなったと思う。

今だって、あの時別れ話をした庭を歩いても辛くはならない。少し感傷的な気分にはなっても、それだけだ。

そういえば、と彼は以前この庭で会った大きな犬を思い出す。あれはグレートピレニーズだった。あの時、彼は初めて自分の中の弱さを口に出した。幼いころから公爵家を継ぐ者として厳しく育てられた彼は、弱音を吐くことなど許されていなかった。けれど、人間でないあの存在の前でなら何故か弱音を吐いてもいいと、あの時はそう思えたのだ。堂々とした美しい犬は、彼の傍にいて、おとなしく抱かれながら彼の話を聞いてくれた。犬がこちらの話を理解して

いるとは思わなかったが、まるで慰めるかのように優しく身体を寄せてくれたあの存在に、束の間ではあれ大層心を癒された事は事実だった。

整えられたライラックの茂みに目を細め、そつと手を伸ばすと、ガサガサという音がして、大きな影が姿を現した。

その影が紛れもなく彼の思い出の犬であると気付いて、デイヴィッドは軽く目を見張ると、一気に破顔した。

「驚いた。まさか会えるとは思っていなかったよ」

声をかけながら近づき、昔と同じように頭を撫でる。見上げてくるつぶらな瞳がまるで自分を覚えているかのようで、彼は嬉しくなる。

しゃがみ込んで、手を伸ばす。犬は黙って彼に抱きしめられ、少し甘えるように身を寄せてくる。鼻を顔に寄せてきて、ペロリと舐められたのには驚いたが、不思議な事に嫌ではなかった。

大きな白い身体に賢そうなアーモンド形の瞳。歩く姿はどこか威厳に溢れている。

犬がしている美しいエメラルド色の首輪に、エルストン子爵の趣味の良さが表れていた。勇敢で従順と尊高いこの犬種は貴族の間でも人気が高く、人に吠える事もせず、かといって無暗に愛敬を振りまく事もしない。犬種としての特徴もあるが、飼い主に影響されたところが多そうだ。以前も思ったが、賢く人に慣れた犬だ。よく躡けられていると感心する。

「覚えている…わけはないか。お前は変わらないな。相変わらず賢くてやさしい犬だ」

覗き込んだ瞳が可愛らしくて、デイヴィッドはその場に座り込むと、この3年の事をその犬に話し始めた。犬は黙って聞いている。

犬相手に真剣に話をしている自分に苦笑しつつ、デイヴィッドは久々に穏やかな時間を過ごしていた。

彼に寄り添って座っていた犬が、ふと顔を上げた。立ち上がった  
一声吠える。

何が起こったのか不思議に思いながら、デイヴィッドは犬が吠え  
尻尾を振った先を視線で追った。

水色のドレスを着た少女が、何かを探してきよろきよろと頭を動  
かしている。犬の鳴き声に視線を定めると、パタパタと一直線に走  
ってきた。

「リラ」

少女は犬を見て、素晴らしく晴れやかな笑顔を浮かべる。犬もそ  
れに応えて彼女の方に走っていくと、彼女を押し倒さないよう気を  
つけた勢いで飛びついた。

13、4歳だろうか。柔らかく波打った栗色の髪を惜しげもなく  
垂らし、澄んだ緑色の瞳は生き生きと輝いている。少女らしくスラ  
リとした身体つきはほっそりとして、柳の木を思わせた。華やかで  
はないが上品な顔立ちに、人好きのする愛嬌のある表情を浮かべて  
おり、見る者を微笑ましくさせるものがある。

少女はデイヴィッドに気付くと、にっこりと笑って犬を伴って近  
づいてきた。いくら幼いとはいえ知らない人間に簡単に近づくのは  
褒められた事ではない。まして貴族の娘なら尚更だ。彼女の所作の  
一つ一つには貴族の娘である事を窺わせる育ちの良さが表れていた。  
おそらくエルストン子爵の娘であろう。確か、社交界にデビューし  
ていない末娘がいたはずだ。

「はじめまして。えーっと……？」

可愛らしく小首を傾げる姿に、デイヴィッドは思わず頬を緩める。  
丁寧な礼をして、細く白い彼女の手を取る。

「はじめまして、姫君。ローランド公爵、デイヴィッド・エリック・  
フォントンと申します」

社交が好きでなく、堅苦しい彼にしては実に珍しく、少しおどけ  
て挨拶をすると、少女が目を丸くした。その少女は一瞬置いて、ク  
スクスと楽しそうな笑い声をあげて優雅に礼を返す。

「はじめまして、公爵さま。エルストン子爵の娘、マーガレット・リースエルよ。こちらはリラ。私の親友」

そう言つて、隣に佇む犬を見下ろす。幼いながら慈愛に富んだ視線に、デイヴィッドは心が温かくなるのを感じた。

「親友ですか？」

「そう、親友。私が嬉しい時、悲しい時、いつでも一緒にいて私と気持ち进行けあってくれるの」

当然のように少女　ミス・リースエルが言う。しかしその瞳の奥では自分の言葉に対する彼の反応を窺っている色があった。

犬は古来より人間の友であるが、獣くさを嫌う令嬢は少ない。年頃の娘が好みそうな小さな愛玩犬ではなく、大型犬を愛し堂々と『親友』と呼ぶ彼女の率直さは珍しいものであった。犬がこちらの気持ちをわかっているという彼女の持論が真実かどうかデイヴィッドは知らないが、この賢い犬に敬意を払いたくなってデイヴィッドは鷹揚に頷いた。

「素晴らしい親友をお持ちですね、ミス・リースエル」

ほほ笑みながらそう告げると、令嬢は驚きながらも実に嬉しそうに笑った。白い頬が興奮に紅く上気して、活き活きとした美しさを際立たせている。

「ありがとう！ふふ、そう言ってもらえて嬉しいわ。ねえ、リラ？」少女が傍らの犬に問いかけると、リラと呼ばれたその犬は少女を見上げ甘えるように尻尾を振った。所作がどこか人間くさくてデイヴィッドは内心愉快でたまらない。

「あなたのリラはとても賢いんですね。本当にこちらの気持ちをわかってるかのようだ。そのような親友がいるとは、貴女は幸せですね」

3年前の一時を思い出しながら彼が言うつと、ミス・リースエルは再び彼に向つて顔を上げ、首を傾げる。傍らのリラを見下ろしてから、今度は彼をじつと見あげる。

「…あの、勘違いだったらごめんなさい。もしかして公爵さまは以

前にもリラに会った事がある？」

突然の質問にデイヴィッドが言葉を失くしていると、ミス・リースエルは少し気まずそうに言葉を続ける。

「なんとなくだけれど、そう感じたの。それに、貴方の使ってる香水に覚えがあるし……」

「私の？」

デイヴィッドの愛用している香水は所有しているバラ園で作った特注品だ。そうそうある香りではない。一体彼女はどこで彼の香りを覚えたというのだろう。

「ずっと前だけれど、リラが残り香をつけて庭から帰ってきた事があったの。とてもいい香りだから覚えていて……間違いないければ、それが公爵さまの今の香りと同じなのよね。あ、不躰な質問だったかしら？ごめんなさい」

申し訳なさそうな顔はしていても、それ以上に好奇心を前面に出した表情でミス・リースエルが告げる。これが妙齡の婦人ならともかく、まだ幼い彼女の台詞というところにデイヴィッドは差して気分も害されずに得心した。

「いえ、お気になさらずに。そうですね……実は私も、何年か前に貴女の親友にお世話になった事があるんですよ」

内緒話を打ち明けるかのようにあえて声を潜めて告げると、少女の顔がパツと明るくなった。くるくると変わる表情が見ていてとても初々しい。ミス・リースエルは朝咲きの薔薇を思わせる瑞々しい笑顔を彼に向けた。

「じゃあ、公爵さまはリラのお友達ね！」

「そうですね……彼女がそう認めてくれるなら」

デイヴィッドが手を伸ばしてその頭を撫でると、リラは嬉しそうに目を細め彼の手を舐める。その様子を見て少女は更に笑みを深めた。

「十分認められてるわ。リラの人を見る目は確かだもの」

ミス・リースエルは飼い犬の傍にしゃがみこむと、慣れた手つき

でその首をかいてやる。珍しい、しかし微笑ましい雰囲気の彼女たちにデイヴィッドはこの数年で一番心が和らぐのを感じていた。

「リラのお友達なら私のお友達よ。公爵さま、お時間があれば一緒にお茶はいかが？」

いきなりの、しかも異例の申し出に、デイヴィッドは驚いてまじまじと少女を見つめる。どこか型破りな子爵令嬢は、彼のそんな態度を気にした様子もなくにこにここと笑っていた。

彼女の教育係はさぞかし手を焼いている事だろう、と思いつつ、デイヴィッドは目じりの皺を深くする。奇妙な事に、彼女の提案に惹かれてやまない。

「光栄な申し出です、ミス・リースエル」

「マーゴと呼んで。デビュー前だし、私はまだ貴婦人ではないの。ねえ、いいでしょう？」

純粹に彼の同席を望む瞳に一切媚はない。久方ぶりに異性と心安らぐ時間を過ごせそうだ。もっとも、女性というにはあまりに幼すぎる姫ではあるけれど。

いずれにせよ、彼女の父親である子爵にも挨拶をしなければならぬ。すっかり同席するつもりではあるけれど、一応それまで返信は先延ばしにしておこう。

彼は期待に溢れる少女にただ微笑み返し、邸に戻るためにそつと手を差し伸べた。

## 第二章

マーゴは半ば呆れて、興奮に騒ぐ目の前の母と姉を見ていた。

今日の午後、我がエルストン子爵邸にローランド公爵が来ると知らせを受けてから俄かに母と姉は浮足立っている。

ローランド公爵はここ数年社交界から離れていたが、今年はシーズンいっぱい参加するという。独身27歳、公爵という身分と財産それから端正な顔立ちを兼ね備えた彼は社交界の女性全員にとって憧れの存在なのだ。

しかしながら、まだデビューしておらず、しかも恋愛事にはまったく興味のないマーゴことマーガレット・リースエルには関係ないだからどうしたのだ、というくらいの勢いである。母親には嘆かれているが、小さい頃は身体が弱くて全然外で遊べなかった彼女は、丈夫になった今、思う存分身体を動かして遊ぶ事の方がよほど重要なのである。

そういうわけで、今シーズン初めて彼が邸を訪れた時も末娘は客人の存在に我関せずと父親自慢の庭に愛犬のリラと遊びに繰り出していた。まさか、そこで噂の公爵に出会うとは思わずに……

「ねえ、お母様？公爵さまはどんな色のドレスがお好みかしら？」

「そうねえ……貴女の肌の色だと明るい色の方がいいけれど、公爵さまの雰囲気に合わせて寒色を選んでもいいわね。ほら、このブルーのドレスなんてどうかしら？」

彼のどこを見たら寒色のイメージが湧くのか疑問に思いながら、マーゴは部屋の片隅でドレス選びに熱心な母娘を見つめる。傍らではリラが優雅に伏して尻尾を揺らしていた。

「ちよつとマーゴ！その犬を近づけないで頂戴。ドレスが汚れてしまうわ！」

「……リラはそんな事しないわよ」

そもそも立ち上がってすらいないのに、と反論するも、姉は聞く

耳をもたない。もともと体格のいいグレートピレニーズのリラを母とこの2番目の姉は毛嫌いしているのだ。まったく失礼もいいところである。

確かに本来なら室外犬として扱われるべきかもしれない犬種だが、気性は非常に穏やかだ。毛並みだって、多少毛の抜け落ちは激しいかもしれないがマーゴの献身的な世話で実に滑らかでうつくしい。アーモンド形の黒い瞳は実に理知的で素晴らしい。そんなリラを邪険にするなんてどうかしている。

「氷の貴公子と名高いローランド公爵さまとお会いするのに、少しでもみっともない格好はできないのよ。彼はとっても評価が厳しいんだから！」

「はあ……」

『氷の貴公子』ってなんだろう……。

マーゴは返事をしながらも心の中で首を傾げる。ここ最近気がついた事なのだが、どうも母や姉の評価と自分が知っている公爵像が一致しないのだ。

いずれにせよ、ここに長くいる事は賢明ではないだろう。マーゴは立ち上がってにつこりと母と姉に笑って見せた。

「お姉さまたちは忙しそうだから、私はもう退散するわね。リラ、いらっしやい」

厄介ものを見る目つきには耐えられない。彼女の大事なリラを嫌う彼女たちには本当に腹が立つ。

でも、残念ながら公爵さまはリラのお友達でリラの事が大好きなのよ、と。マーゴはあえて姉たちに告げる事なくさっさと部屋を後にした。

マーゴが庭で初めてローランド公爵と会って以来、彼はちょこちよことエルストン子爵邸を訪れるようになった。

注目の独身男性が特定の家に頻繁に訪れる理由と言えば1つ。お



目当ての令嬢がいるからだと世間は考える。エルストン子爵には3人の娘がいて、長女は既に嫁いでいるが、次女は社交界2シーズンの花ざかりである。それゆえに、母も当の次女も公爵に少しでもいいところを見せようと必死なのだ。

だが、しかし。

「貴方の目当てがリラだと知ったら、お母様たちどうするのかしらねえ……」

「どうもしなくていいんじゃないか？」

バスケットからいそいそとカボチャのパイを取り出しながら答えるのは、噂の公爵デイヴィッド・エリック・フォントンその人である。一緒に入っていた林檎を取り出すと、入っていたフルーツナイフで半分にしてからリラに与えた。

「私がここに来ているのは君とリラ、2人と過ごすためで、君の姉上に求婚する気はない。実際、ここに来てって彼女たちの相手はほとんどしていないし」

口で言うほど簡単な問題ではない事はデイヴィッド自身がよく知っているくせに、あっさりとそんな事を言う。周囲に子爵令嬢に求婚しているという噂が立とうが何だろうが彼女とリラを切り離すつもりはないであろう口ぶりがマーゴには嬉しかった。

マーゴと同じようにリラを大切にして友人として接してくれる彼女は、彼女にとって貴重な友人の一人だ。リラは一見身体が大きくて怖そうだから、倦厭する人が多い。本当はとても優しく賢くて、こんな素晴らしい犬は人にもいないと思うのに。この公爵だって、リラのそんな優しさに助けられた一人なのである。

眩い純色の金の髪に綺麗なアイスブルーの瞳。スツと通った鼻筋にまるでギリシア彫刻のように素晴らしく整った顔立ち。深緑の上着も、洒落た結びをしたクラヴァットも嫌味なくらい決まっている。距離を置きたくなるほどの美貌をもっているのだが、醸し出す大らかな雰囲気それを相殺している。

これのどこが『氷の貴公子』なのだろう。

柔らかに微笑む姿も寛ぎきつた表情も楽しそうな会話も、どこをとっても彼の通り名にそぐわない。社交界という人たちは浮かれすぎて頭にうじが湧いているのかと思ってしまう。

その疑問を率直に聞いたら、デイヴィッドはしかめ面をして、普段はこんなに表情豊かではないのだと白状をした。それが信じられずマーゴが驚いた顔を見ると、パイを口にしながら説明を続ける。「嫌なんだよ、ああいう社交の場が。だからどうしても無愛想になる」

「……だつたら出なければいいじゃない」

「私だつて出たくない。けれど、礼儀つていうものがあるからね。今まではちよつと事情があつて離れていられたけれど、そろそろ妻を探索つて親族からも圧力をかけられたし。公爵つていう立場もある」

「……ご愁傷様」

マーゴは詳しく知らないが、デイヴィッドが極端な女性不信である事は知っていた。結婚という言葉を毛嫌いしているのも知っている。どう見たつてマーゴより美人で女ざかりの姉を無視して彼女やリラと時間を過ごすのだつて、彼の根深い女性不信が原因である。

「まったく、冗談じゃない。結婚なんてしたくないというのに」

マーゴはメイドが用意してくれた紅茶を手際よく注ぐと、悪態をついているデイヴィッドに手渡す。満足そうにそれを啜り愚痴を溢す公爵は、まったくもって紳士らしくないが、だからこそマーゴは好きだ。儀礼的な形だけのものは自分たちに似合わない。

「マーゴやリラとこつやつてお茶をしているのが一番好きだ」

さらりと言ってくれるのはいいが、それはマーゴがおおそ“女性”とはかけ離れていて、完全に恋愛対象外だからこそ出てくる言葉だろう。そう思うと少し複雑だ。

別にデイヴィッドに恋をしているわけではないけれど、こうも子供扱いされるのもおもしろくない。決してデビューしたいわけではないが、マーゴだつて3、4年後には社交界にデビューして大人の

仲間入りをするのに。

嫌味の一つでも言ってやろうかと傍らのデイヴィッドを見やると、予想外な事にそこではいい大人がリラを抱きかかえるようにしてくすかと思っていた。

呆氣にとられて寄り添う友人たちを見つめっていると、リラがマーゴに向けて視線を流し、パタリと尻尾を動かした。どうやら寝かしておいてあげなさい、と言いたいらしい。

「…まあ、しょうがないか」

おそらく、彼が言うようにデイヴィッドにとって彼女たちとの一時は数少ない穏やかな時間が過ごせる機会なのだろう。時折見せる暗い表情や、姉や母と共にいる時のすまじった顔を思うと、心ない一言や態度で希少な機会を奪ってしまう事は可哀そうに思えた。一回り年上のくせに、どこかほっとけない友人である。

リラの背を撫でながら、マーゴは自分の分のお茶に口をつけた。

もう花も終わりのライラックが、深い色の葉を重ね、影をつくりながら、さわさわと耳心地良い音を立てていた。

### 第三章

その日の午後、エルストン子爵邸を訪れたデイヴィッドは、常にないほど穏やかな笑顔を浮かべて邸の主に挨拶をした。

「こんにちは、エルストン子爵」

「やあ、ローランド。3日ぶりだね」

エルストン子爵マークス・ジャン・リースエルはからかうように笑うと、客人ににこやかに礼を返した。淡い金の髪に緑色の瞳、華はないが品のいい整った顔立ちをしていて、柳のような細い目がいかに人を良く見せている。年は50代前半なのだが、がっちりとした身体つきのせいが見た目よりずっと若々しい。

デイヴィッドとエルストンは高祖父を同じとする遠い親戚にあたる。年こそ離れているものの、この一見温厚な、けれど実は一筋縄ではないかない年上の子爵とは気が合って小さい頃からよく相手をしてもらったものだ。そしてそれはデイヴィッドが大人になってから更にその新密度を増したように思える。

「昨日の舞踏会は有意義に過ごしたかい？」

エルストンの問いにデイヴィッドは軽く肩をすくめる。

「ダンスはともかくカードは楽しめましたね。伯母上から大量の花嫁候補を紹介されなければ、もっと快適だったのですが」

由緒正しい公爵家の主が独身では決まりが悪い。デイヴィッドには男兄弟がないので、後継となる男子もできるだけ早くと望まれている。一度婚約破棄してから真剣に妻を探す気を全く起こしていない家長に、古傷を抉るように親戚たちは嫌味を重ね花嫁候補たちを紹介してくる。

今や社交界一の「結婚したい男」として知られているデイヴィッドなので、花嫁候補は底をつかない。

「それはそれは。ダンスホールの一審奥にいても入口にまで花嫁候補が並んでしまうな」

「勘弁してくださいよ。結婚なんて冗談じゃない。本当は今年だつて社交界に顔を出す気はなかったのに、伯母や祖母に泣かれて仕方なくロンドンに来たんですよ、僕は」

玲瓏とした美貌と洗練された身のこなしからロンドン一魅力的な紳士と名高いデイヴィッドだが、本来の性格は生真面目で飾り気がなく、カードやビリヤードより領地でのんびり過ごしている方が性に合っている。

女性たちに素気ないのも、紳士たちの刹那的な享樂を共にしながらどこか冷やかなのも、すべては興味が無い故の事。それが彼の完璧な外見から変な方向に転じ、一部では『氷の貴公子』と謳われ崇拜されているのだからいい迷惑な事この上ない。

「それでは、私にとつては幸運なのかな。うちのエレナが君にキヤロラインを嫁がせようと躍起なんだ」

「…勘弁してください」

心底嫌そうに頭を振るデイヴィッドに、エルストンは屈託なく笑う。その様子から察するに、彼の妻が2番目の娘を公爵に嫁がせようとしているのは事実だが、彼自身はそこまでこだわりがないようだ。

そうでなければ、こう何度も訪問しているのに婚約の話を出してこない訳がない。

しかもエルストンはデイヴィッドがここに来ている真の理由を薄々察していて、こつそり奥方やキヤロラインの目を盗んで彼をご自慢の庭園へと案内してくれるのだ。

今日も女性陣への挨拶を飛ばして庭園へ続く回廊を歩きだすエルストンに、デイヴィッドは思わず笑みをこぼした。

「キヤロライン嬢がどうというわけではないんですが、同じ女性ならいつそリラをくださいませんかね」

リラ。

確かに女性の名前だが、その実はグレートピレニーズという大型犬だ。よほど躰が良いらしく、人に吠える事も噛む事もしないで素

直に抱かれてくれる。かなり賢い犬で、その毛並みは滑らかでいつまでも触っていたくなる手触り、瞳は純粹で穏やかでこちらを見透かしたかのようなその光は知らず心を癒してくれるのだ。

「リラに会えた事は今年一番の収穫だと思っているんですよ」

半ば本音でそう言うと、エルストンは苦笑しつつ振り返る。

「確かに、君が彼女に会うためにこんなに熱心に通うようになるとは思っていなかったよ。でも彼女は駄目だよ。リラを君に渡したりしたら、私は一生マーゴから恨まれてしまうから」

「はは、確かに。それ以前に、リラの方がマーゴから離れてくれるかどうか。彼女のマーゴへの忠誠心は絶対ですから」

苦笑交じりに告げる言葉は真実で、子爵の末娘とその飼い犬の絆は人間同士に芽生えるものより遙かに重く感じられる。賢いグレートピレニーズは幼い頃病弱だったという末娘にとって唯一の遊び相手であったようで、互いに掛け替えのない存在なのだ。

そんな事を思案していると、エルストンがさりげなくけれど明らかに意図している絶妙な間でふと独り言のように呟いた。

「まあ、マーゴを娶れば、特典としてリラも付いてくるがね」

予想もしない話の展開に、デイヴィッドは思わず噴き出した。

いつもと同じ庭園の、いつもと同じ場所で親友の毛並みを撫でていた少女は、いつもと違う様子で来訪した友人に片眉を上げた。

「どうしたの、ヴィッド？ なんだか、いつもにも増して様子が変わだわ」

「…マーゴ、それは心配しているのか貶されているのかよくわからないよ」

「そう？ でも減らず口が叩けるようなら大丈夫ね」

口に細い指をあててくすくすと笑う。そんなマーゴの姿は幼いながらも可憐で、デイヴィッドは今まで考えもしなかった将来案に頭を悩ませる。最近はマーゴも自分を『ヴィッド』と愛称で呼ぶようになり、ますます親しくなったところだったのに、妙な考えを植え

付けられてしまった。

まさかエルストン子爵の思惑が彼の次女ではなく三女にあったなど、どうして考えられよう。マーゴはまだ社交界にデビューまで4年もあるのだ。幼女とまではいかないが、年端もいかぬ少女に対して一体自分に何を考えるというのだろうあの人は。

いやしかし、と。溜息を吐きながらもデイヴィッドは改めて友人である子爵家の末娘を見る。

こちらを訝しげに見つめる瞳はエメラルドのような澄んだ緑色で、モスリン地のチョコレート色のドレスがほっそりとした身体を包んでいる。防寒用かクリーム色のショールを羽織り、栗色の豊かな髪は相変わらず纏められもせずふわふわと背中に流れていた。特別美人というわけではないが、上品で可愛らしい顔立ちに、誰からも愛されるような輝きをもった表情が浮かんでいる。数年もすれば周りの者を魅了する美しさを持つのは疑いようがない。

人柄もいい。他の貴族の娘のように作法や仕来りを気にしすぎる事もなく、ドレスや化粧、家柄の自慢等のくだらない会話を振りかざす事もない。自然を愛し、親友である犬を愛し、ありのままをありのままの姿で受け止められる寛容さを幼いながらも持っており、実に魅力的な性格をしている。デイヴィッドが飾り気なく素のままに接する事のできる数少ない人物である事は確かだ。婚約者に裏切られて以来、女性に対して不信任を募らせているデイヴィッドだが、マーゴなら大丈夫だという確かな信頼をこの数カ月間で互いの間に築き上げていた。

家柄も公爵である自分からすればやや見劣りするが、れっきとした子爵家の令嬢だ。しかもエルストン子爵家は財産なら並みの伯爵家にも劣らない。年の差も離れてはいるが貴族の結婚としては13歳差なら許容範囲内だろう。

デイヴィッドとしては認めたくないのだが、考えれば考えるほど、目の前の少女が自分にとって一番理想的な花嫁像である事に気付かされる。

結婚に対しては拒否的だが、どうしてもしなければならぬのなら、相手はマーゴのような女性がいいとそう思ってしまう。

問題があるとすれば…

「ヴィッド？」

「…」

「…ねえ、ヴィッドってば」

「…」

「……リラ、やってちょうだい」

主人の命を受けたリラが、呆然と思惑を巡らせているデイヴィッドに押し掛かって尻もちをつかせる。そして止める間もない鮮やかさでその顔をベロツと大きく舐めた。

「わっ。リラ、びっくりさせるなよ」

「ヴィッドが反応してくれないからよ」

そう、憤然としてマーゴが告げると、デイヴィッドは素直に謝罪する。しかしやはり彼女の顔を見つめるのを止められず、マーゴの顔はますます不可解なものを見る目つきになった。

その表情はとても幼くて、こんな少女に大人の事情を顧みようとした自分が汚らわしく思えてデイヴィッドは反省する。

「ごめん。ちよつと色々考えさせる事があつてね」

「あらあら、お疲れさま。でもせっかくここに来たんだから、今くらいは全部忘れてのほほんと過ごしたら？いつもそうしているじゃない」

にこにこ笑うマーゴが可愛らしくて、デイヴィッドはつられて笑う。

手を伸ばしてリラの頭を撫でると、リラは心地よさそうに目を細め、マーゴはそれを嬉しそうに見ていた。

気取る事のない彼女たちとの時間は、デイヴィッドにとって何より安らげるもので、陽だまりの中にまどろんでいるような心地よさがある。中毒性でもあるのか、一度味わってしまったらいつまでも浸っていたくなる空間だ。



もし彼女と結婚したのなら、数年後にはこの光景は当り前のものとなるのだろうか。

またもや脳内に浮かび上がってきたアイデアに、デイヴィッドは思案する。

2人の結婚に問題があるとすれば、まずは両者の気持ちだ。

本来なら貴族同士の結婚に本人の意思は重要ではない。あくまで家と家の繋がりであり、両家の意思が一致していればそれで良いのだ。しかし、もし彼がこの天真爛漫な少女と結婚するとするならば、その時にはきちんと彼女の意味が欲しい。

そしてもう一つの問題は、この天真爛漫で型破りな少女が、はたして貴族社会という堅苦しい世界の、それも公爵夫人という重圧に耐えられるかどうかだ。

「ねえ、マーゴ」

「なに？」

「君は、結婚についてどう思ってる？」

唐突なデイヴィッドの質問に、マーゴは大きな目をパチクリと瞬き、不思議そうに首を傾げる。

「突然なんで？ああ、また、誰かに結婚話でも勧められたのね。だから今日はちよつと様子が変なんでしょう」

実の姉も彼を夫候補として見ている事を知っている少女は、苦笑しながら彼の質問に対する答えを考えているようだった。そんな彼女の隣でリラが座りながら首を回して主人を見ている。微笑ましい光景にデイヴィッドは目を細める。

「結婚……か。正直あまり考えていないわ。だって社交界デビューまでまだ4年もあるのよ？お母様は4年しかない！って言っているけれど、やっぱりまだ4年も、だわ。遠い先の事よ」

呆れたように言ってから、マーゴは行儀悪く頬杖をついてリラの背を撫でる。

「誰かの奥さんになるなんて想像がつかないわ。もの凄く退屈そうだし」

実に彼女らしい返答にデイヴィッドは笑みを浮かべながら彼女の傍に座る。幼い頃病弱だった反動か、良家の令嬢らしくなく外で遊ぶことが大好きなこの少女にとって、女主人として慎ましく生活しろというのは苦痛を伴う退屈さなのかもしれない。

そう考えれば、マーゴに公爵夫人という大役を任せるのはやはり無謀なのだろう。思わずため息を吐いてしまった彼をマーゴが振り返る。

「なあに？」

「いや、何でもないよ」

そうデイヴィッドは告げるが、マーゴはそれを良しとしないようだ。

「やっぱり変よ、今日のデイヴィッド。無理やり縁談でも進められているの？」

そうではないのだが、彼女に対して何と喋っているのかわからず、デイヴィッドは曖昧にほほ笑む。気遣わしげな笑顔が申し訳なく、思わずその小さな頭を撫でてしまった。

そんな彼をじつと見つめると、何を思いついたのかマーゴがいきなり手を伸ばしてデイヴィッドの首に抱きついてきた。

「…マーゴ!？」

華奢な身体が彼にぴったりくっついており、首元に細い腕が巻きついている。小さな背中を覆うように流れる栗色の柔らかな髪。ライラックの香りがほのかに漂う。

驚きに身体を硬直させたデイヴィッドに対して、マーゴは本当に気遣わしげに彼を抱きしめ、耳元で呟く。

「…ヴィッドは大変ね。公爵だから責任も重たいし、結婚なんてしたくないって言っても逃れさせてもらえない。いつもいつも、大変なのよね。よくわからないけど、辛いよね?…わかってあげられなくてごめんね。でも、傍にいるから」

泣きそうな小さな声に、デイヴィッドは思わず彼女の背中を撫でる。

傍らではリラもまた気遣わしげに彼の身体にすり寄っていた。

「小さい頃、寂しい時や辛い時はいつもリラがこうして傍にいてくれたの。私はずっとリラを抱きしめていて、そうしたらいつもいつの間にか楽になってた。だから今は、私がヴィッドにこうしてあげる」

その言葉に、デイヴィッドは3年前のリラとの出会いを思い出す。そういえば、彼女もずっと彼に抱かれてくれて、気がついたら心が軽くなっていた。そして、現在のマーゴの行動に納得するのと同時に、なんだか少しだけ笑えてきてしまった。

13歳も年下の少女に、自分は『慰めるべき存在』としてあやされているのだ。なんとも奇妙で、面映ゆく、けれど不快ではないのがまた不思議だった。

腕の中にある小さな身体が思った以上に柔らかい事に驚きながらも、デイヴィッドは離れないようしっかりと腕を回した。その力強さにマーゴは少し驚いたようだが、黙って身体を預けてくる。

男女の駆け引きや艶めいた意味などない抱擁。しかしそこに含まれている優しさが、温かさが堪らなく愛おしくて、デイヴィッドはアイスブルーの瞳を堅く閉ざす。

離せない。

傍にいたい。

この腕の中の存在が、どうしようもなく愛しい。

自分の中の切なる想いを聞きながら、デイヴィッドは波打つ栗色の髪をゆっくりと手で梳いていく。

いつか、きつと。

彼女を本当の意味でこの腕に納めたい。いつも隣に、彼女とその親友を置き心地よい時間を当たり前にしたい。

腕の中の少女はきつと想像もしていない未来だろうけれど、彼としては何としても現実になりたい。それは夢を見るより切実な、胸

が焦げつくほどの憧憬の想いだった。

そのためになら、どんな努力だって惜しむものか。数年待つ事だって厭いはしない。そうするだけの価値はあるのだから。

芽生えた想いと決意を胸に、デイヴィッドはライラックの香りを纏う乙女をもう一度しっかりと抱きしめ直した。

## 第四章

とある午後、いつもと同じエルストン子爵邸の庭の、いつも同じライラックの木の茂る場所で、マーゴとリラはお茶を飲んでいた。日光の下に堂々と出て愛犬とお茶会をする時点で、マーゴは英国淑女の基準から大きく外れている。礼儀作法の授業を受けているのかといえば、今まさにさぼっている最中だ。

そんな彼女の事を母や姉が怒るのは仕方がないことで、それはマーゴも重々承知しているのだが、“礼儀作法”に対する嫌悪感と母や姉に対する反発心から、ついついあえて礼儀を無視したくなるのである。

「だいたい、意味がわからないのよね……『そういうものだから』って言われたらそれまでなのはわかっているんだけど……なんであんなに面倒なのかしら」

ねえ？と隣に座る愛犬に小首を傾げながら問いかけて、葡萄を一房とる。行儀悪くぶつりと音を立てながら中身だけを吸い出して、木のふもとに掘られた小さな穴の中に皮を入れた。

「なんでその穴の中に皮を入れるんだい？」

いきなり影が差して声が降り注ぐ。マーゴがきょとんと見上げると、そこには見事なブロンドとアイスブルーの双眸をもった美貌の主がいた。

「デイヴィッド」

「やあ、こんにちは。君たちはいつもここにいるんだな」

噂では『氷の貴公子』と呼ばれているらしい彼、ローランド公爵ことデイヴィッド・エリック・フォントンは、その呼び名に似つかわしくない温かな微笑みでマーゴとリラに笑いかける。

そしてマーゴに差し出された葡萄の房を受け取ると、「失礼」と声をかけてからリラを挟むようにして座りこむ。

最近よくお茶会に参加するようになった、この新たな客人のため

に、余分に用意していたカップを取り出してマーゴはお茶を注ぐ。

「ようこそヴィッド。はい、お茶をどうぞ」

「ありがとう」

カップを手渡しながら、につこりと笑ってライラックの木を見や  
った。

「小さいころからこの場所は私たちのお気に入りなの。ここは涼し  
いし過ごしやすいし、ちよつと庭園でも隠れた場所にあるから家の  
者にも見つかりにくいし」

エルストン子爵邸の庭はなかなか広大なので、こういう小さな死  
角は多々ある。小さい頃こそ病弱で庭になど出ることもできなかつ  
たマーゴだが、現在元気に走りまわっている今ならそのほとんどを  
把握しているといつていい。ただ、その中でも特にここがお気に入り  
なのは、何よりこの傍らの木に理由があつた。

「それにね、これはリラの木でしょ」

「…ああ、なるほど」

ライラックは、フランス名では「リラ」という。マーゴは知らな  
いが、彼女の大事な親友は、リラの花が見事な庭をもつ家から引き  
取られてきたらしく、マーゴの父であるエルストン子爵がその花の  
名を付けたのだという。ちなみに、このライラックもリラが来た年  
に子爵が命じて植えさせたものだった。

「だから特別な」

「思い入れがあつて当然…か」

きちんと自分の気持ちをわかつてくれた事を感じて、マーゴはに  
こりと年上の友人に微笑みかける。

まったくデイヴィッドという人間は、リラに対して誠意をもって  
接してくれたり、マーゴの事を馬鹿にしなかつたりとできた人間で  
ある。

「じゃあ、もちろん君は、花の中では一番ライラックが好きなんだ  
ね」

「もちろんよ!」

まるで眩しいものをみるかのように目を眇めて尋ねるデイヴィッドに、マーゴは満面の笑みで肯定する。

「ならばこれはお気に召してもらえるかな」

デイヴィッドは懷を探ると、掌に収まるほどの小さな包みを2つ取り出す。興味深げにマーゴが見下ろす前で、するとその包みを開けると、中からはリラの花を模した髪飾りとチャームが出てきた。

「…可愛い」

思わずポロリと口に出してから、マーゴは慌てて口を紡ぐ。すると、デイヴィッドはますます目を細めて、先にチャームの方を手にしてかざす。

「可愛いだろう？こっちは、リラの首輪に付けたらいいと思うんだ。エメラルドともよく似あうように銀で作ってもらったし」

そのまま大人しく座るリラの首輪にライラックのチャームを付ける。想像通り、とてもよく似合っていて、マーゴは少女らしく「うわぁ」と目を輝かせる。

「で、こちらの髪飾りをマーゴに。リラとお揃いで」

「え…でも……」

友人であるにせよ、異性から身につけるものをもらうのはいかなものか…と逡巡したマーゴに、デイヴィッドは問答無用で髪飾りをつけた。

「何を今さら。礼儀作法の授業をさぼる様なお嬢さんが気にすることかい？それに、私と君は遠縁とはいえ親戚なのだから、黙って受け取っておきなさい」

ほら、可愛い。と微笑まれ、マーゴはしばらく戸惑う。けれど、やはりそこは女の子で、こんな素敵な髪飾りが自分のものになる事に嬉しさを感じて、はにかみながらコクリと頷いた。

「ありがとう、ヴィッド」

お礼を言いながら頬にキスをする。すると、主人の真似をしてリラも大きな体をデイヴィッドに預けながら顔を舐めた。

くすぐつたいと笑いながら、デイヴィッドもまた実に楽しそうだ。  
「花の時期には本物と組み合わせても映えると思うよ。そういう風に注文したからね」

「え！？これってもしかして特注！？」

再び慌てだすマーゴを、くすぐす笑いながらデイヴィッドは腕に閉じ込める。

「一度受け取ったものを返すのは無しだよ。返されても行く先がないしね」

「いや、それはそうかもしれないけど…」

髪飾りはともかく、首輪用のチャームはあまり行く先があるとはマーゴにも思えない。

じゃれ合う二人に、自分も混ぜるとばかりにリラが混ざってきて、団子になりながら芝生の上に寝転がる。

笑い声が広がって、大事な人たちの温もりが心を震わせる。

ああ、なんて幸せなんだろう。

そう思いながら、マーゴはくすぐすと笑い続け、もう一度デイヴィッドにお礼を言つとその頬にキスを落とした。



## 最終章

「キャロライン、ローランド公爵は諦めなさい」

まるで今日の天気の話をするかのようなさり気なさで父親のマーカスが姉に告げるのを聞き、エルストン子爵の三女マーゴは飲みかけていた紅茶のカップを宙で止めた。

ローランド公爵デイヴィッド・エリック・フォントンは今シーズン（と言うかおそらく独身の間はずっと）社交界一結婚したい独身貴族で、遠縁ではあるがエルストン子爵家の親戚でもある。

以前はそれほど親しくもなかったのだが、今年になって彼は頻繁に子爵家を訪れており、距離間もずっと近くなった。もっぱら主である父親かマーゴとその親友のリラに会いに来ているのだが、この絶好の機会を母と2シーズン目を迎えた姉が逃すわけがなく、隙を見つけてはデイヴィッドを捕まえて振り向かせようとしているのは確かだ。

彼自身はキャロラインがどうというより、結婚そのものに興味がなく、だからこそマーゴやリラと過ごす事を好んでいるのだが、母や姉にとつてみたら知った事ではないらしい。デイヴィッドとキャロラインが世間で噂になつてゐるのをいいことに、他の令嬢に対して牽制したり、噂を事実にしようと躍起になつたりしている。

それでもなかなか靡かないデイヴィッドに、2人が苛立ち始めているのは知っていた。あぐく先日家族でのピクニックでは彼が2人を全くに近いほど無視し、すべて友人に託してしまった事に対しては後の怒りようが凄まじかった。ただ、デイヴィッドもそれだけ辟易しているという事だろう。そろそろ潮時である事は事実だ。

もっとも、マーゴには母と姉がそれで納得するとは思えなかったが。

「どうしてですのお父様!？」

「そうですね貴方!公爵はきつとキャロラインに好意を持ってくれ

ているに決まっています！ただ、少し変わったお方だから素気なくされているだけで、あれは照れているのですわ！！」

言いきる母親の理論の破天荒さに、マーゴは思わず口元を引き攣らせる。少しどころか、だいぶ無理やりすぎる考え方だ。もし社交界で渡り合っていくのにこれだけの勘違いぶりが必須と言うのなら、マーゴは間違いなく社交界ではおぼれ死ぬだろう。

マーゴの内心に同意してか、傍らに座っていたリラがパタリと尻尾を揺らした。

「エレナ、キャロライン。君たちも本当はわかっているんだろう？どう足掻いても、公爵、デイヴィッドがキャロラインに求婚してくる事はある得ないよ。望みがない男は諦めて他に目を向けなさい。オルレッド子爵なんか、昨年から気にしてくれているではないか」

姉には悪いが、父親の言葉は事実だ。ただ、マーゴが言えば角が立つので、彼女はあくまでお行儀よく紅茶を飲みながら聞いている。しかし本心では、父親の援護をしたくてたまらなかった。

「お父様はどうして諦めるなんて仰るの？公爵家との縁談なんてこんな名誉なことはいわ。むしろお父様が勧めてくださるべき事なのに、どうしてそんな事を仰るの…？」

キャロラインの涙ぐむ声をどこか白けた気分で聞いてしまう事は妹として失格かもしれない。やれやれ、と皆には気がつかれないようにマーゴはこっそり溜息をつく。

確かに、デイヴィッドが姉と結婚し公爵家とより近い縁戚になれるならばそれは非常に名誉な事だ。

けれどデイヴィッドが女性不信で結婚を嫌悪しているのは、友人であり愚痴の聞き役であるマーゴとリラが一番良く知っている。最近ますます憂い顔になっており、友人としては非常に心配しているのだ。

だから本当に、そろそろ母と姉には諦めてほしいのだ。結婚を望む令嬢たちから逃げに来ている親戚の家で結婚を迫るような可哀そうな事をしないでほしい。

もしこれ以上姉たちの攻勢が激しくなったら、この家に来なくなってしまうかもしれない。

彼曰く、自分たちと過ごす間は気楽でいられるそうだし、マーゴとリラにとっても彼は大事な友人である。彼がこの家を訪れなくなったら、まだ社交デビューしていない自分たちはなかなか彼に会えなくなってしまう。それがマーゴには嫌だった。

「オルレッド子爵のどこが悪い？彼も十分男前だし何よりお前を好いてくれている。デイヴィッドはお前をただの遠縁としか思っていないし、彼と結婚してもお前が幸せになれるとは私には思えないのだよ」

「そんな、ひどい……！！」

本格的に泣き出してしまった姉に、マーカスは眉を八の字にして困った顔をする。さめざめと泣く姉の隣で、母親のエレーナが愛しい娘の背中を擦って慰めていた。

そんな家族を少し離れたソファで見守るマーゴとリラは、いつまでも手つかずのまま放置されている3人のティーカップの中身を、勿体ないと思いながら一人黙々とお茶を飲んでいた。いろんな意味でお腹がいっぱいだとはリラ以外の誰にも言えないし、言うつもりもなかった。

結局、決着のつかなかった家族会議を終えた翌日。

マーゴは珍しく父親とリラと3人（？）でピクニックに出かけた。母と姉がいなのは、昨日からの気まずさがまだ残っているからだ。末娘で昔は体の弱かったマーゴを、父は他の娘より可愛がっており、時折こうして一緒に出かける。また、そんな時もリラを忘れず大切に扱ってくれる父親をマーゴもまた慕っていた。

「マーゴは昨日の事、どう思ってる？」

「お父様の言うことが正しいと思うわ。これ以上お母様やお姉様たちが迫ったら、ヴィッドは発狂しちゃうわよ」

花畑を歩いている途中で不意に父親に聞かれて、マーゴはあの時思った事を率直に答える。齒に衣を着せない娘の言葉を、子爵は特徴的な糸目をにこにこさせながら黙って聞いていた。

マーゴは、母と2番目の姉が自分をあまり好いていない事を知っている。どちらかと言えば存在を気にしていないと言った方が正しいかもしれない。そのため、母と姉がいる場面では本心を出す事をしないが、父親だけの時は素直に意見を出す事になっていた。

「やはりマーゴも私と同意見か。まあ、一番デイヴィッドに近いのは君たちだから、わかっているのは当たり前かな」

そう言いながら、父娘の間を歩くリラの頭を撫でる。

「キャロラインも本当はわかってるんだろうけどね…」

溜息を吐きながら苦笑するマークスにマーゴは尋ねる。

「ヴィッドと結婚するのって、そんなに拘る事なのかしら。社交界の令嬢みんなの憧れだっという事は聞いているけれど」

眉目秀麗、十分すぎる財産と国でも指折り数えられる名家の家長、どれを取ってもデイヴィッドが夫としての条件が最高級である事は知っているが、社交界デビューもまだで、しかも世論と少し関心がずれているマーゴにはいまいち理解しきれないのも事実である。

世間ずれしていない末娘に、マークスはさつきとは違った種類の苦笑を浮かべて、マーゴの頭を軽く撫でる。エメラルドのような澄んだ娘の瞳を見つめながら尋ねた。

「マーゴだったら、どんな人と結婚したい？」

唐突な質問に、マーゴは可愛らしく首を傾げ、それからおもむろに隣を歩くリラを見る。大好きな親友と顔を合わせてにつこりと笑むと父親に視線を戻した。

「リラと一緒に出嫁に行かせてくれる人かしら。今みたいに邸内で一緒に暮らす事を許してくれる人なら二つ返事でお嫁に行くわ」

今度は違った意味で世間からずれた娘の言葉に、子爵はとうとう堪えきれず噴き出す。娘が唯一と言っていい友であるリラに執着しており、彼女と離れたくない事は知っていたが、まさか夫を探す第

一条件がリラだとまでは思っていなかった。

そんな父親の胸中を半ば察して、マーゴは不貞腐れたように顔を背ける。

「いいじゃない。だって、本当にそれが一番で唯一の条件なんだから。それさえ許してくれるなら、どんなに退屈だって堅苦しくたって我慢するわよ。私はキャロライン姉さまのように美人でもなければ、メアリー・グレイお姉さまのようにお淑やかでもないもの。高望みはしちゃいけないの。わかってるくせに、お父様の意地悪」

2番目の姉のキャロラインは社交界で一番ではないにしろ、かなり注目を集める美人だ。金に近い褐色の髪はシャンデリアの光にいつも眩く光り、ドレスアップした姿は妹のマーゴから見ても美しい。長女のメアリー・グレイは容姿こそキャロラインに劣るものの、話上手の聞き上手で、優美で洗練された気品のある女性である。

出来の良い2人の姉がいる上に、マーゴは幼い頃体が弱かった事もあって母親からは散々自分に対する不満を聞かされてきた。誰かに嫁ぐなどまだ遠く先のようにしか思えないが、その時は高望みをするまいという事は、小さい時から決めてきた事だ。唯一の望みでさえ、自分にとっては分不相応な事かと思う。けれどどうしてもこれだけは譲れないのだから仕方がない。

目標として歩いてた大きな木まであと少し。残り少しの距離を小走りでたどり着くと、マーゴはくるりとスカートを翻して父親の方を向いて微笑む。

「私とリラの事、一緒にもらってくれるっていう奇特な殿方がいたらそれで大歓迎よ。20くらい年が離れていても気にしないわ。もちろん、素敵な人だったらもっと嬉しいけれどね」

「何の話をしてるんですか、一体？」

突如割り込んできた声に、マーゴはびっくりして後ろを振り返る。すると、そこには外出用のジャケットをしっかりと着たデイヴィッドが穏やかにほほ笑んでいた。

「ヴィッド!？」

「やあ、マーゴ。こんにちは、エルストン子爵」

「マーカスで構わないと言っているだろう？」

にこやかに答える父を見て、マーゴはデイヴィッドがここにいる事が彼の企みである事に気が付く。マーカス・リースエルという人間は何かを企む事が大好きな人間なのだ。今回はたまたま嬉しい企みだし、教えてくれなかった事にさしたる不満はないが、実の娘を引っかけるのは止めてほしいと時々思う。

そんな娘の思惑など気にもせず、マーカスはさっきまで父娘で話題にしていた事をデイヴィッドに話している。わざわざ他人に聞かせる話でもないどころか恥にもなりかねない話なので慌ててマーゴが止めようとすると、デイヴィッドが意外な事を口にした。

「なら、マーゴは私のところに来たらいいんじゃないか？」

「……………は？」

あまりにもさり気なさすぎるが中身は極めて重要なその言葉に、マーゴはピタリと動きを止める。

そんな彼女の様子が気が付いているに違いないのに、デイヴィッドは我関せずと話を続けるのだから驚きだ。マーカスが話を止めないのも幼い少女にはよくわからない。

デイヴィッドは過去に婚約者に裏切られてから、女性不信の上、結婚に対して嫌悪感を抱いているのではなかっただろうか。言いよる貴婦人たちを極度に冷徹な態度で追い払い、親族を始めとした年配の女性たちから持ち込まれる縁談に辟易して始終マーゴとリラに愚痴を言っていたはずだ。

それがどうしていきなり積極的に結婚を匂わせる発言ができるのか？マーゴにはわからない。それもまだ社交界デビューしていない少女相手に、だ。

「私なら、君がリラと一緒に来てくれる事は大歓迎だ。むしろ進んで一緒に来てほしいけど」

毒気なく笑う姿は彼の二つ名である『氷の貴公子』を覆し、むしろ太陽のような眩さだ。

呆氣にとられて口を開いたままの主人を心配してか、それとも自分の名が出た事に反応してか、リラがマーゴに身体を摺り寄せてきて、ようやくハツと我に返った。

「ヴィッド、熱でもあるの？」

第一声をそう声かけてから、マーゴは小さな手をデイヴィッドの額に伸ばす。身長差がありすぎて、精一杯背伸びをしても額にはぎりぎり指先が届いただけだったが、どうやら熱はなさそうだ。

「ひどいな」

「だって私はまだ14よ？さっきの話だってあくまで仮定だもの。本気にするなんておかしいわ。そりゃ、お嫁に行く時はリラも一緒ってところは譲れない事実ではあるけれど」

そう言いながら、デイヴィッドの額を軽く叩く。こんな親しい動作も、おそらく自分だから許されている事なのだとマーゴは知っているが、それも彼女がまだ社交界デビューを果たしていない14の少女だからなのだ。

そして、そんな少女にいきなり結婚の話をするデイヴィッドが甚だ性格が悪く思えてしまった。いくら尊敬しているからといっても、そういうところはマーカスに似てほしくない。

そう告げると、デイヴィッドは嘖き出し、マーカスは情けなさそうに眉を下げる。

「マーゴ、それはひどくないかい？」

「そうかもね。でも好きよ、お父様」

につこりと笑って父親に近づくと、背伸びして頬にキスをする。

それを嬉しそうに受け止めたマーカスは、笑いながら娘をギュッと抱きしめた。

「私も好きだよ。可愛い私のお姫様」

そうして頬にキスを返すと、今度は真剣な顔つきでマーゴを覗き込んだ。

「デイヴィッドがお前を本気で欲しいと言っても、可愛すぎて手放したくないんだよ。でも、彼以上にお前をお前らしくしてくれる男

はいないとも思ってる。だから、許したんだ」

「……ちよつと待って、お父様。それ、冗談じゃないの？」

糸目からわずかに覗く自分と同じ色の瞳に、マーゴはようやくこの話が冗談で流していいことではない事に気が付く。

慌ててデイヴィッドを振り返ると、慣れた手つきでリラの背を撫でていたデイヴィッドが、見た事もないくらい穏やかにほほ笑んでいた。そのどこか色気がある表情に、不意に胸が鳴ってしまったのは絶対秘密だ。

綺麗なアイスブルーの瞳を見つめたまま動けずにいるマーゴに対して、リラはマーゴの傍らをすり抜けてマーカスと連れだってどこかへ行ってしまった。

思いがけず2人きりにされて、マーゴはものすごく焦っていた。

デイヴィッドがゆつくりと近づいてきて、片膝をついてしゃがみこむと、形の良い綺麗な手を伸ばしてマーゴの頬にそっと触れた。

彼が浮かべている今にも蕩けそうな甘い笑顔に、マーゴの心臓は押しつぶされそうなほど痛くなる。

「もちろん、今すぐではなく4年後か5年後か、君がデビューしてからの話になるけれど……私の妻になつてくれないかな、マーゴ。リラと一緒にうちにおいで。私は知つての通り女性不信だし結婚嫌いだけれど、君なら信じられる。ずっと一緒にいたいと思う。君と、リラとずっと一緒に過ごしたいんだ」

ゆつくりと、マーゴの心に言い聞かせるように、一言一言に心を込めてデイヴィッドが告げる。

「……私、キャロライン姉さまみたいに美人じゃないよ？」

「馬鹿な事を言わないでくれ。マーゴは可愛らしいし将来絶対美人になる。私が保証するよ」

「メアリー・グレイ姉さまみたいに気遣いのできる女性でもないし、お淑やかでもない」



「氣遣いなら十分できている。私が落ち込んでいる時はいつだって慰めてくれるし、私が心地よく過ごせるようにいつも工夫してくれている。お淑やかさなんて求めてないさ。少々お転婆な方が君らしくて私は好きだ」

「お母様からは、いつもどうしようもない子って言われているの」

「私にとつたら、どうしようもなく可愛らしくて素敵な子だ」

「公爵夫人なんて務められないわよ」

「まだ4年もある。それまでに勉強すればいいし、私だって全力で君をフォローするよ。大丈夫だ。嫌だったら一緒に領地に引きこもってもいい」

段々声を小さくしながら、おそろおそろ尋ねるマーゴを、デイヴィッドがやさしく抱きしめる。

マーゴは父親以外にあまり抱きしめられた事がない。上の姉は出会えばいつもやさしくしてくれたけれど、物心ついた頃には嫁いでいてあまり実家には帰ってこなかったのだ。体が弱く友人もいなかった。だからマーゴはリラが絶対唯一でその温もりが欠かせなかったのだ。

デイヴィッドは、彼ら以外で初めてマーゴを抱きしめてくれた友人になる。今までも何度かこうして抱きしめられる事はあったが、彼の腕の中はいつも温かい。今までは彼が自分に興味を無くすまでの短い時間だけと思っていたが、もしかしたらこれから何回もこうやって抱きしめられる事になるのかもしれないと思うと、少し不思議な感じがする。

「リラと、一緒にいい？お邸の中でもリラと一緒に過ごさせてくれる？」

大きな背中を抱きしめて、ジャケットを強く握りしめながら問う。コトリと小さな頭を彼の肩にもたれかけた。

「一緒においで。もちろんいつだって一緒に過ごしていい。」

ただ、私がいる時は私も一緒に過ごさせてくれる事が条件だけれど」茶目っ気を出して付け加えられた言葉に、マーゴは思わず笑って

しまう。その瞳が少し潤んでしまったところを、デイヴィッドに見られなくてよかったと思う。ただ、口に出した声が少し掠れていた事には気がつかれてしまったかもしれないなかった。

「お父様が、キャロライン姉さまにヴィッドを諦めなさいって言った意味がわかったわ」

「エルストン子爵：マーカスはそんな事を言ったのか。まあ、確かにミス・キャロラインには諦めてもらうしかないんだけれどね」

「私、姉さまに恨まれるわね」

「否定はできないな。どうにかして納得がいくだけのお相手を見つけてもらって、早々に結婚してもらわないと」

心の底からうんざりとした様子で告げるデイヴィッドに、マーゴはくすくすと笑う。

あの姉がそう簡単にデイヴィッドを諦めるとは思えないし、今日彼が告げた事を知ったら怒り狂う事は間違いないが、今ばかりはこの穏やかな幸せに浸らせてもらいたい。

恋するとか愛するとか、そういう気持ではないかもしれない。

けれどデイヴィッドは、父親とリラ以外に初めてマーゴをマーゴとして受け入れてくれた人物で、自分にとっては掛け替えのない人物の一人だ。

そんな大好きなデイヴィッドが、姉たちではなく、優雅な他の貴婦人たちでなく、マーゴをたった一人として選んでくれた事が嬉しかった。

「ねえマーゴ、プロポーズの返事を聞かせてほしいな」

やわらかく微笑みながらデイヴィッドが視線を合わせてくれる。

その表情は端正でとてもドキドキさせられたけれど、同時に何故か可愛らしくも思えて、マーゴは少しだけ意地悪をする事にした。

「一緒に嫁ぐ親友に相談しないといけないの。4年後までには答えを返せると思うわ」

最上級の笑顔で彼に微笑めば、デイヴィッドは愕然とした表情で彼女を見つめていた。

「…それはないんじゃないか、マイ・ディア」

「あら、本人の意見は大切でしょう？」

「それはそうだけど…」

情けなさそうな顔に、マーゴは笑って頬に小さくキスを落とす。仲が良い友人として過ごしてきたけれど、キスするのは初めてだ。デイヴィッドも一瞬驚いたが、すぐに笑って頬にキスを返してきた。

今の自分たちでは世間的にも精神的にもこれが限界だろう。将来を考えているにはあまりに拙く幼い関係だけれど、たぶんこれが一番いい。

「来年には、ロンドンの家にも領地のハンプシャーにある邸にもライラックを植えようと思うんだ」

思いついたように告げるデイヴィッドは、悪だくみを打ち明ける子どものように楽しそうだ。

「君とリラの花だろう？」

そう言えば、以前何故広い庭園の中でもライラックの傍を好むのか告げた事があった。それを覚えていてくれた事に驚きながらも感心する。そしてその打ち明け話の素晴らしさに、マーゴは歓声を上げながら再びデイヴィッドに抱きついた。歓喜のあまりもう一度デイヴィッドの頬にキスをする。

そして大好きな、おそらく将来の婚約者に笑顔で提案した。

「4年後にはそこでお茶会をしましょうね、ヴィッド。ロンドンでも、ハンプシャーの邸でも。私と貴方と、リラと一緒に」

## 最終章（後書き）

…と、いうわけで完結です。

文章も拙い、設定もすっかりしていないこんなお話に付き合ってくださりありがとうございます。

なんとなく話ができてなんとなく書き進めていたら、いつの間にか6話も行ってしまったあたり、作者にも「あれ？」な作品でした（笑）が、最終的にはかなりキャラたちもお気に入りになりました。

なんの盛り上がりもなく、ただほのぼのとしているだけのお話ですが、それがまたこのキャラ達らしいと思います。本音を言えば、もう少しデイヴィッドの「氷の貴公子」的な部分を出してみたかったです、もしかしたらそれはまた別のお話で書くかもしれません。

その際はまたよろしくお願いします。

ちなみに、後一編、番外編があるので、それを載せて完結マークをしたいと思いますv  
ではでわv

**番外編 伯爵の友人観察日記（前書き）**

番外編です。

デイヴィッドの友人の伯爵さま視点です。

時期としては本編最終章の直前くらいかな。

## 番外編 伯爵の友人観察日記

「なあ、本当に俺が行ってもかまわないのか？」

「今さら何を言っている。エルストン子爵は快く了承してくれたんだし、お前は申し込みを間髪入れず受け入れたじゃないか」

「まあ、それは事実だけだね」

小窓から秋も近いロンドンの街並みを眺めていると、不意にポツリと真向かいに座っていた男が呟いた。

「それに、お前に来てもらわなければ私が困る」

「…は？」

「いや、なんでもない」

無愛想でも恐ろしくうつくしく、そのまま広間に飾りたくなるような友人の顔を、俺は首を傾げ見返した。

俺、プリストルム伯爵フィリップ・ヴァルフレーは、友人であるローランド公爵にエルストン子爵家との日帰り旅行兼ピクニックに誘われた。現在子爵家を訪れ子爵とそこご家族をお迎えに来ているところである。

正式に言えば主として誘われたのは友人であるローランドで、俺はおまけのようなものだ。

ローランド公爵デイヴィッド・エリック・フォントンといえば、完璧なる美貌と英国でも屈指の名家の家長である社交界で最も注目されている男の一人。とある事情もあり、あまり社交の場が好きではないため、舞踏会に出ても踊る事は稀。話をしている最中も滅多に表情を動かす事はないが、それでも圧倒的な人気を誇っている。花嫁候補である貴婦人方に冷静を通り越して冷徹な態度をとり続けるその姿は『氷の貴公子』と称されていた。

確かに、時折ブリザードが吹いたんじゃないかってくらい冷たい態度を取る男なので、この評価は実に真つ当なものと言えよう。そ

れでも令嬢たちは諦めないのだから俺はそちらの方がすごいと思う。そんなローランドが、最近エルストン子爵家に頻繁に出入りしており子爵家の令嬢との恋仲を噂されている。ローランド自身は否定しているし、俺も正直信じられないのだが、お相手であるキャロライン嬢は友人方に2人の仲をほのめかしているらしい。

2人の言い分のどちらが正しいか。ローランドがキャロライン嬢を公的な場で特別扱いしていない事から、彼の話の方が信憑性は高いが、万が一の可能性としてローランドの照れ隠しというのも否定できない。噂の真否は今社交界で注目の話題だ。

そんな中で降ってわいたこのピクニックのお誘い。これは噂の真否を確認する絶好の機会だと、俺は意気込んで二つ返事で受けたわけだ。

邸に入ると、主であるエルストン子爵が人の良い笑みを浮かべて俺たちを歓迎してくれた。元々ローランドとは遠い親戚にあたるそうだが、親しげな様子に彼が相当この家を訪れているのは間違いがないと思わせた。

「デイヴィッド、それにプリストルム伯爵も。よく来てくれたね」

「今日は、身内での日帰り旅行に誘っていただきありがとうございます」

「畏まらないでくれ。遠縁だが、今でも君と私は親戚だ。だから今日は我が家の親愛なる一員として過ごしてほしい。君もだよ、プリストルム伯爵」

「ありがとうございます」

俺はにっこり笑って挨拶をしながら、目の前の子爵を気がつかれないよう観察した。

このエルストン子爵をローランドは心底敬愛しているという。しかし見るからに人の良さそうなこの中年紳士、見た目を裏切って実はかなり喰わせ者だ。先ほどの会話の中でローランドのファーストネームを呼んだり、『今でも』という思わせぶりの言葉を使ったりする点からもそれは明らかである。

おそらく本格的にローランドを娘の夫として迎え入れる気なのだろう。尊敬している親戚からの言葉を、この友人はどう思っているのか。少なくとも、過去似たような態度を取ってきた貴族たちに対して、ローランドは徹底して冷たい態度を取ってきた。

そんな事を思い出しながら隣の友人を見た俺は、目の端に映った光景に目を剥いた。

衝撃の大きさに、思わずこの光景を脳裏から焼き消せないものかと真剣に思う。

友人としてもうかれこれ10年以上付き合っているが、ローランドがはにかむように笑う姿など見た事がない。

嘘だ…これは幻だ…誰か冗談だと言ってくれ!!

脳内で激しく葛藤しながらも、やはり子爵令嬢との縁談は事実なのかと唸った。ローランドが子爵を尊敬していたとしても、あの言葉でこれほどの反応を示すとは思えない。やはり今後より近い親戚になる予定があるからの表情ではないかと思う。

しかし、だ。

俺にはどうにも納得がいかなかった。

子爵家の二番目の娘であるミス・キャロラインは確かに美しい。金褐色の巻き毛も緑の瞳もほっそりとした、けれどメリハリのある身体つきも女性として非常に魅力的だ。だが、他に特筆すべきところはなく、あくまでそれだけの女性のように思える。他の大勢の貴婦人方と何の変わりもない。伯爵以上の爵位をもち彼女以上に美貌に長けた娘も社交界にはいる。それなのに何故ミス・キャロラインがローランドの目に適ったのか全くもってわからないのだ。

「…プリストルム？」

訝しげな視線を受けて、俺はハッと友人に目を移した。

先程の笑顔はどこへやら、すっかりいつもの無愛想に戻っている。「いや、今日のミス・キャロラインはさぞかし美しいんだろうなと思っただけ」

少し考えてから冗談めかすように肩を竦めながら返す。



男の自分から見ても実に魅惑的なこの友人に、少しでも可憐に美しく見られようと必死になる令嬢が必死になるのは間違いがないだろう。

「…ああ、なるほど」

ところが、予想外に無反応であるローランドに、俺は思わずきよとんとした。

それが将来婚約する令嬢に対する反応か？

男であれば、女性が自分のために着飾ってくれるのは嬉しい事だろう。それが好意をもった女性なら尚更だ。それなのにこの関心のなさはなんだろう。

半ば呆然としている俺を尻目に、子爵が「そうだね」とのほほんとした様子で返答する。

「キャロラインもエレーナもピクニックを提案した一昨日からずっと今日の服装について悩んでいたから、相当着飾ってくるに違いないな」

につこりとローランドに向けて笑った瞬間、彼の端正なる柳眉の間に皺が寄った。

「冗談じゃないと言った風情は最初に子爵に対して見せた表情と随分異なる。そんな失礼な態度をとっていいのか？そんな岩のような表情では子爵令嬢にも子爵にも、あまりいい感情は引き起こさないだろう。」

恐る恐る子爵の表情を窺うと、これまた予想に反して子爵はにこにこ楽しそうに笑っていて、俺は完全によくわからなくなった。

一体何がどうなってんだか…。ていうか、キャロライン嬢と結婚するんじゃないのか、こいつは？

事実と推察がかみ合わず、ちぐはぐな現状に大いに振り回されていると、二階のドアが開いて、小柄な二つの影が姿を見せる。

子爵夫人と噂のキャロライン嬢かと思って顔を上げたが、そこにいたのはまだ社交界デビューをしていないであろう少女だ。その隣には大きな白い犬が彼女に寄り添うようにつき従っている。

そう言えば、子爵にはあと一人娘がいたはずだ。この少女がおそらくそうなのだろう。

ほっそりとした身体の少女は、淑やかさを無視して駆け降りるようにして階段を降りてくる。黄色いデイドレスが翻り、きっちり纏められていた濃い栗色の髪がその勢いで少しほつれた。

「いらつしやい、ヴィッド！」

もうすぐ階段を降り切るといったところで少女が元氣よくそう挨拶する。その元氣の良さにもびつくりしたが、それ以上に飛び出た名前にびつくりした。

彼女が読んだのはローランドの愛称だろうか。親戚だからかもしれないが、俺の知っている限り、彼は従姉妹にあたる婦人たちにもきちんとな前で呼ばせている。愛称だなんてとんでもない。

驚いて友人を見て            おそらくコレが本日最大の衝撃だ。頭がくらくらししてきた。

友人は…『氷の貴公子』と名高い友人は…満面の笑顔を彼女に対して向けていたのだ！

満面の笑顔だ、満面の！

まだ彼がここまで捻くれる前の、寄宿学校時代にだって、こんな笑顔を見たことがないくらい、ローランドはとても嬉しそうにその少女に微笑みかけている。

「マーゴ、リラ」

あまつさえ自分から歩み寄って、階段を降りる少女に手を差し出しているのだから驚きだ。

儀礼的でない限り、彼はけして自ら進んで女性をエスコートするという事をしない。貴婦人たちから非常に羨ましい好意的な、あげくは煽情の瞳を向けられても彼はそうする義務がなければ決して動かないのだ。自分から動くのはせいぜい親族の女性くらいだろう。

それがなんとまあ、この幼い少女にはサービスが良い。日頃のサービス精神を100集めてもまだ足りないくらいの歓待を彼女は受けている。

あげくに。

「そのドレスは初めて見る。よく似合っているな。ミモザの妖精のようだ」

ちよつと待て

！！

ローランド、お前女性を褒めれたのか！？いつもなら社交辞令さえろくに言わない男だろうが！！なんだその砂を吐きそうな甘い台詞は！！

そんな俺の当惑をよそに、本人たちは仲睦まじそうに会話をしている。妖精と褒められたせいか、少女の頬は少し赤いが、会話が続けられないレベルではなさそうだ。素晴らしい。これが舞踏会でローランドに焦がれているお姫様なら顔から火を吹いて卒倒している事だろう。

年の差があるため一見仲の良い兄妹のようなのだが、言いきるには違和感がある雰囲気だ。

「今日は髪も結っているんだな。珍しい。大人びて見えて別人みたいだ」

ローランドがほほ笑みながら、少しほつれてしまった彼女の髪を整える。左手は以前彼女の手をもったままだ。マーゴと呼ばれた少女はそれを照れる事もなく受け止め、自分より随分長身のデイヴィッドに可愛らしい笑顔でお礼を言っていた。

「しょうがないでしょ。今日はお庭にいるのとは違うのだから。でも、髪を結ったくらいでは大人になんてならないわ。お世辞を言っても喜ばないわよ」

少女はくすくすと笑いながら、エスコートしていたローランドの手からするりと抜ける。

それから俺の方を向きニコツとほほ笑んだ。近寄って来る彼女の向こうで、離された手を宙に余しながら名残惜しげに少女の背を見つめるローランドが見える。

なんなんだ、その切なげな表情は。お前そんな表情できたのか。思わず口元を引き攣らせる。

離れてしまった主人の代わりか、彼女の犬がデイヴィッドに近づいて鼻を寄せていた。どう見ても慰められている。天下のローランド公爵が犬に慰められている。どんな夢だこれは。

「はじめまして。ブリストルム伯爵さまですよね？マーガレットと申します」

「末娘だ。14歳になる。見ての通りおてんばでね」

ふんわりとしたスカートの裾をつまんで可愛らしく挨拶するマーガレットに、父親であるエルストン子爵が苦笑する。

もう、と拗ねたように頬を膨らます彼女の仕草は可愛らしいが幼い。

「ブリストルム伯爵フィリップ・ヴァルフレーです。ご機嫌うるわしゅうミス・リースエル。今日は招いていただいてありがとうございます」

「私ではなくてお父様が、だけれどね。ヴィ：ローランド公爵と並んで名高い伯爵さまをご招待できる事はお母様もお姉さまも喜んでいらしたわ。2人ももう少ししたら参りますのでしばしお待ちください。えっと、その間にリラを紹介させていただきます。私の親友なんです」

闊達な物言いは14という若さもあるが生来の要素が強いに違いない。まだ洗練されきっていない言動は澆刺とした少年のようで、淑女とは程遠いが、思わず口の端を上げてしまうような微笑まじさがあった。

紹介するといった『リラ』とは、あの白い犬の事だろうか。マーガレット嬢が振り向いて名前を呼ぶと、犬はローランドとともにこちらに歩いてきて、主人の隣に並ぶ。

毛並みの素晴らしい大きな犬で、アーモンド形の賢そうな瞳が印象的だ。気性が大人しいのは見て分かるが、首輪だけしてリードも付けられていないのは珍しかった。そもそも、こんな少女がこれほどの大型犬を好む事から珍しいが。

「これはまた、見事な犬ですね」

俺の言葉に、マーガレット嬢が一瞬片眉を上げる。何か不快だったのだろうか。それに気づいて謝ろうとする前に、横からローランドが素早く口を挟んだ。

「リラは確かに素晴らしいけれど、マーゴの大切な親友だ。犬と言う一括りで締めてほしくないなブリストルム。もつとも、君に悪気がないのはわかっていているけれど」

穏やかだが確実に俺を諫めるローランドの言葉に、俺は今度こそ開いた口が塞がらなかった。やばい。わずか四半刻で一生顎が外れたまま戻らなくなりそうだ。

かばっている。

あの『氷の貴公子』が淑女と呼べない年齢の少女をかばっている。

マーガレット嬢はそんなローランドを嬉しそうに見上げているが、驚いた様子は皆無である。つまり、彼女にとっておそらくコレは当り前の光景なのだ。

あ、ありえない……

絶対絶対ありえない……

お前そんなに優しい奴だったか！？いつもならここでは鼻先をフンと冷笑して終わりだろうが……！！

何も言えずただ口をパクパクさせている俺の肩を、ポンと誰かが叩いた。ぎぎぎ、と音が鳴るんじゃないかというくらいのぎこちなさで首を回した先では、エルストン子爵が同情の視線で苦笑している。

「残念ながら、夢じゃないよ」

それは天使の慈悲か悪魔の宣告か、俺には何とも言う事ができなかった。

それからしばらくして子爵夫人とキャロライン嬢が揃いピクニクに出かけたものの、ローランドは大半の時間をミス・マーガレットとその親友のために費やし、残りの時間も子爵と議論するなどで

2人の貴婦人のお相手はもっぱら俺が務める事となった。

デイヴィッドのおまけとして付いてきたつもりが、主役級の扱いになって戸惑うばかりだ。

何だか生贄にされるために自分が連れて来られたような気がしたし、おそらくその考えは間違っていないのだろうが、まあ仕方ない少なくとも、マーガレット嬢に対するローランドを見続けるよりは遙かに精神衛生上楽であったので、むしろ喜んで務めたくらいだ。

何しろマーガレット嬢と共にいる友人といったら、日頃の無愛想が何かの間違いかと思うくらい表情が豊かで、実に楽しそうなのだ。それでも後からマーガレット嬢が「今日はいつもよりずっと表情が乏しくて堅苦しかった」ともらしたのだから、普段はどれだけ寛いでいる事が想像するに恐ろしい。

絶対間近で見たら精神発狂するという妙な自信がある。

「お前が少女趣味だとは知らなかった」

子爵家からの帰り道でポツリと口にすると、恐ろしく冷たい目で睨まれた。

「冗談だよ。そんな恐い目で見んな」

そう言いながらも、彼の様子からローランドは本気でマーガレット嬢を想っている事を確信する。

妹のように可愛がっているにしては、朝会った時彼女がすり抜けた際に見せた表情は切なすぎた。

子爵家に通い詰めているのも、マーガレット嬢がいるからなのだろう。子爵令嬢にご執心という噂は事実だったというわけだ。

…もっとも、相手は噂と違っていたけれど。まさかキャロライン嬢ではなくその下の14歳のマーガレット嬢だとは誰も思っまい。

ただ、友人としては大いに納得できる選択ではある。

マーガレット嬢はまだ少女だという事もあって、普通の貴婦人にはない天真爛漫さと活発さを持っている。幼いがそれなりにしっかりした考え方も持っているし、話していて楽しい。変わったところがあるのは否めないがそれすらも微笑ましく思え、愛敬のある笑顔

は実に魅力的だ。

つまるところ、今まで誰にも心を開かなかった『氷の貴公子』を動かすには持つて来いの人物というわけで…

「なあ、朝子爵が言つてた『今は』って、もしかしてそういう意味？」

返答の期待は半分くらいしかしていなかったが、驚いた事にローランドは仏頂面を浮かべながら、でもどこか不貞腐れたようにポツリと答えてくれた。

「口約束はしているよ。もちろん数年後の話だが」

「なるほど。つまり子爵には了解を得ているんだな」

「了解というか…もともと提案してきたのはエルストン子爵の方だ。まあ、冗談半分といった感じではあったけれど」

なるほど。確かにそれなら納得だ。それにしても、あの喰えない子爵はローランドが何を求めているのかよくわかった上で、次女ではなく末娘を勧めてきたとは思えない。

「まあ、お前が幸せになれるなら俺はそれでいいと思うぞ」

苦笑しつつもそう返したら、ローランドは実に幸せそうに笑った。ああ、絶対こいつ幸せボケしていやがる。

本当に、俺が知っていたローランドと、表の皮だけ一緒に中身は別人なんじゃないかと思うくらいの違いだ。けれど、こいつがもつと少年の頃は、確かにこんな純粹でやわらかな一面もあったなと思えば、やはりマーガレット嬢と一緒にいる時のローランドの方が本来の姿なのだと思う。

こうやって、氷が溶けたかのような笑顔を俺が見られるだなんて思いもしなかった。

羨ましい事だ。

年が離れていようと少しくらい相手が変わっていようと、たった一人その人だけを欲する。そう思えるだけの相手が見つかるって事は相当貴重で珍しい。ローランドには是非そのたった一人の相手と幸せになっしてほしいと思う。

友の顔を見ながらやれやれ、と息を吐く。

友とその幼い想い人のために、どんな協力ができるかと考えながら、俺は流れゆくロンドンの街並みに視線を移した。

訪れるのは秋のはずなのに、なんだかとても温かそうな景色だった。



## 番外編 伯爵の友人観察日記（後書き）

…実は書いてて一番楽しかったお話です（苦笑）

フィリップ（伯爵）の一人称が書いてとても書きやすかったv

誤字脱字、表現間違いなどがあればご指摘ください。よろしくお願いします。

では、これでライラックの庭シリーズは一度閉じようと思います。  
お付き合いいただきありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9932/>

---

ライラックの庭

2010年10月8日12時26分発行